

ティーチングポートフォリオ

京都ノートルダム女子大学

ND 教育センター

金美仙（キム・ミソン）

目 次

1. 教育の責任	3
2. 教育の理念	4
3. 教育の方法	5
4. 授業の評価	6
5. 学習の成果	6
6. 教育の改善	6
7. 今後の目標	7
8. 資料	

1. 教育の責任

研究の出発は日本語学でありながら、韓国語学の研究も並行し教育へ繋げてきた。2003年度から東京所在の大学などで非常勤講師として韓国語¹を教えはじめ、教育歴は17年になる。現在本学のND教育センターに所属し、韓国語全般を担当している。外国語教育に与えられる責任は、教育一般の観点から語られる部分もあろうが、具体的には学習者がその言語を駆使できるようになることにあると考える。

自国にいながら外国語を習得するにあたって最大の難点は実践力の獲得である。今や社会全般において韓国語教育・学習の実践的な成果を出すための環境が向上していて、大学もその環境の中で教育の責任を負わされているといえる。学習者の韓国語の学習能力が全般にわたって上達している点、インターネットなどのさまざまなツールによって学習環境が飛躍的に改善されている点、さらには日韓両言語の言語構造が類似していることなどが利点となって、学生は在学中にある程度の実践力をつけることが可能となった。現に、数年前からその実例が現れている。

一方、大学の外国語教育において実践的な成果にもまして重要なのが基礎力をつけることである。基礎力の有無は長期学習につながる鍵となり、卒業後数年経って学習を再開する場合にも基礎力は大きな力を発揮するのである。基礎力をつける間に実践的な成果はあまり実感できないかもしれないが、目先の成果ばかりを追って大学教育の責務を果たしたとはいえないと考えている。もっとも、実践力の獲得のためにも基礎力は必須である。

本学では、正規科目として「韓国語Ⅰ」「韓国語Ⅱ」「韓国語Ⅲ」を開講しているが、ほかにフリーターキングを行うチャットルームが11月からスタートしている。正規の科目は言語の4技能を総合的に習得する授業である。さらに実践力を強化するために学生はチャットルームに参加することができる。

2020年度の担当科目

韓国語Ⅰa, 韓国語Ⅰb, 韓国語Ⅰc, 韓国語Ⅰd

韓国語Ⅱ

韓国語Ⅲ

チャットルーム：2020年度11月にスタート

¹ 以後、本学の正式科目名である「韓国語」を用いる。

2. 教育の理念

「学習者にとって必要なことを行う」が韓国語教育に対する私の基本的な考え方である。第2言語教育及び外国語教育では、世界的に英語教育への需要が高いことから、1960年代からさまざまな教授法をはじめ多くの授業モデルなどが提唱されている(石田, 1995)。これらは、従来の文法中心の教育方法への反動で実践力の獲得に重点をおいたものであり、いかにアウトプットできるかに集中した教育方法である。ところが、アウトプットはインプットを前提に機能するものであり、アウトプットの実現可能性をまずはインプットの成功如何に求めるのが妥当である。「従来の文法中心の教育」の問題は、その教育法自体というよりはインプットの看過にあったといえる。

インプットとアウトプットのうちどちらが良い方法なのか論じているわけではない。現状に照らし合わせて、必要なことを、必要なのに欠けていることを補うべきだということを強調したい。日本における韓国語教育に限っていえば、学習者の学んだ知識が内在化しない、実践力が見つからない理由として、インプットの重要性を見落としている現状を指摘せざるを得ない。「話せない」理由として大きく2つ挙げられる。ひとつは、話すための材料である語彙や文法などがインプットされていないこと、もうひとつは、その材料がインプットされているもののアウトプットの仕方がわからないことである。多くの学習者がインプットに成功しないのであれば、教育の現場ではまずインプットの成功に取り組むべきである。

実際、韓国語の学習者はインプットに失敗して学習が止まってしまうケースが多い。インプットの過程に知識の理解と暗記がある。教育の現場で、知識を理解させる活動は一般的に行われているが、暗記は宿題など学習者の自習に任されている。しかし、初修外国語の場合、単語を覚えることは自習できるほど容易な作業ではない。母語で学ぶ他の学問とはその学びの特徴が異なるのである。学習者はその単語の「覚え方」を必ずしも知らないのである。授業では、知識の理解にとどまらず知識の暗記のために積極的にサポートする必要がある。つまり、講義の形にこだわることなく、必要であれば思い切って家庭教師的な手助けをも行うべきである。入門段階でこのようなサポートを行うことによって、学習者は語彙の覚え方をも学ぶのである。

学習者に知識の暗記というインプットが欠けているのであれば、授業ではそれを積極的に行うべきであると考えられる。教育法の成功例として存在するさまざまなモデルから大いに学びながらも、教育現場からの生のニーズをも真摯に受け止め取り組むことが大事である。

3. 教育の方法

決まった教授法にこだわるのではなく学習者に必要なことを行うことを心がけている。学習者に必要なことを行うというのは、たとえば覚え方・勉強のし方を心得ていない学習者に対しては覚える作業を行いながら覚え方・勉強の仕方を提示することを意味する。現に、初修外国語（コリア語）の場合は、その勉強のし方を心得ていない学習者が多く、それが原因でドロップアウトするケースが多いのである。学習者にとってインプットの手助けが必要なのであれば、授業ではそれを行うべきである。

（1）インプット（暗記）を促す

言語知識を脳に装着しない限り「話す」というアウトプットは不可能である。コリア語学習の第1関門である「文字と発音」を乗り越えてからドロップアウトするケースがあるが、その主な原因は語彙の暗記に失敗したことにある。学習者にとって最も難しいのが語彙を覚えることである。文法の習得も語彙の暗記と深くかかわっている。文法は単語のつづりのうえに成り立つ構造物であるため、単語を正確に覚えていない状態では文法学習の難易度は倍増する。「文法ができない」という実体は単語のつづりを覚えていないことであるケースが多いのである。本学のコリア語の初級クラスでは、「書く-発音-書く-発音」のような繰り返し作業を行い、これによって学習者は、発音とつづりと意味とをしっかりと覚え、学習能力をも獲得していく。レベルアップするにつれて、授業における「覚える作業」の比重は自ずと減っていく。

（2）徹底した発音のトレーニングを行う

コリア語の学習における難関のひとつに発音の習得がある。日本語にない言語音と音韻変化が多く、初級段階では持続的なトレーニングが必要である。そして、学習者自らの習得が難しいだけに、授業での指導に頼るところが大きい。日本語なまりのまま学習が進んでしまうと、いざ必要な場面でその発音を駆使することができなくて敗北感を覚え学習をあきらめてしまうケースが多々ある。文法学習と違って、発音は学習の初期に固まってしまうので、学習が進んだ後からは修正が効きにくい。本学のコリア語教育は、音声学的根拠に基づいて、音の作り方や出し方及び発声のコツなどを指導しながらトレーニングを行っている。

（3）アウトプットを促す

私は、コリア語教育を始めたころから「学んだことは話せる」をモットーに教え方の工夫をしてきた。インプットのほうに比重を置くようになったのもそのためである。しっかり覚えた言語知識をもってアクティビティを行うように授業を設計している。教科書の課ごとにインタビュー形式の会話を行うコーナーを設けている。ほぼフリートークの形式で数名の相手と問答を行うのだが、これが反復練習となり会話を覚えていくのである。決して「知識の理解」に留まらない語学教育を心がけている。

(4) ブレンド型授業の導入

2020 年度には否応なくオンライン授業を迫られたが、その肯定的な部分を積極的に取り入れるようにしたい。ブレンド型というのは、オンラインと対面の混合型のことを指すが、この授業形態を工夫することでより高い学習効果が得られると実感している。オンライン授業では知識の伝達を、対面授業ではトレーニング及びアクティビティを行っている。オンライン授業において学習者は自らの学習能力を発揮し磨いていく。対面授業においてはグループ分けして少人数の会話練習ができるのである。従来の対面のみの授業では、学習者の発話の機会が少ないというのが決定的な弱点だったが、ブレンド型授業ではこの問題が解消され、学習者の発話の時間が大幅に増えた。

4. 授業の評価

授業評価アンケートで昔から一貫していただく意見は「説明がわかりやすい、練習が多くて覚えられる、厳しくてやさしい」であった。ときどき「厳しすぎる」という意見もある。

5. 学習の成果

本学に限らず私のコリア語の受講生のうち、韓国の大学院へ進学した人をはじめ韓国関連の仕事に就いている人が多数ある。銀行やメーカー、航空会社、空港、旅行会社などに就職し活躍している。

発音を重視した教育は一定の成果を出していると思っている。キャリアに生かすほど高レベルのコリア語の学習は、「発音」がその成功を左右する。上級になってから発音の修正を強く願う人もいるが、発音のトレーニングをきちんと受けた学習者は上級になってからも無難に学習が進み、留学先でも代表スピーチを任せられるなど力を発揮している学生がいた。

ブレンド型授業におけるアクティビティは、学習者にとって自己点検のきっかけにもなった。五里霧中で苦戦している学習者の何人かは、ブレンド型授業で行うアクティビティを経験し、これまでの自分の学習内容を省み改めて上達している。嬉しい成果であった。

6. 教育の改善

インプットとアウトプットとをめぐって大きく2回の改善を行ったと思う。コリア語教育を始めて3年ほど経った時点でインプットの重要性を痛感し方向転換をした。授業内でインプットの実現に力を注いだ。その成果を実感しながら10年ほど経った頃にはインプット一辺倒になっているのではないかという疑問がわきあがった。いつの間に受講生たちはインプット能力が向上していたのである。この時点からより豊富なアウトプットのデバ

スを考案すべく取り組んでいる。

7. 今後の目標

ICT の発展により個々人の生活も目まぐるしく変わっていきななかで、語学学習における利用可能なツールも想像を超えて豊富になっていく今日である。大学の語学教育においてもこのような技術を積極的に取り入れるべきであると考え。インプットのために行う作業の場合、やるべきことがある程度決まっているが、アウトプットのためのコンテンツやデバイス作りは無限に可能かのような感じさえする。私自身も新しい技術を絶えず身につけながら、学習効果のより高い学習ツールを取り入れていきたい。

8. 資料

石田 敏子 1995『日本語教授法』大修館書店; 改訂新版